

ランチの写真

吉田史子 岩手

これが最後などと思はず君は笑むスマホの中のランチの写真  
どうしても思ひ出せない入院の前夜にふたり食べし夕食  
いつもいつも夫にやさしくと思ひぬきやさしくなきわれ知るゆゑいつも  
やさしからぬわれでありしよこの週も手帳に記せり「夫にやさしく」  
「ただいま」と「行つてきます」をつねに言ふここにあなたはゐると信じて

闇の出口

薄葉 茂 宮城

明日は来る核の脅威を伝へても作る新聞の日付は明日あした  
疲れ目をとぢれば記事の情報が脳の右から左へと飛ぶ  
夏すぎてそれでも夏はつねにある球児はさけぶ日曜の朝  
一日に決まつて橋を二度越える暮らしの幸にこのごろ気づく  
あれこそは闇の出口とおもふほど満月しろくあかるく浮かぶ

こころはいつも

斎藤美衣 神奈川

落つるまへ椿はわれを閉ぢこめて落ちてゆきたり夕立のなか  
夢の尾がなまあたたかく残る朝さらさら白き米を研ぐなり  
自転車はいつもわたしを置いてゆく こころはいつも後ろ、後ろへ  
はつものの温州みかん薄皮を剥きてほのかなあかりに出会ふ  
ま四角に夜気を閉ぢこめ上下するエレベーターの冥くらさに混じる

登校する子

佐藤

玄

神奈川

秋の夜に思ひ出づるは成績を付けぬ小さき学校のこと

「暗い曲聴くのが好き」とほそり言ふ活発にして明るき生徒

苦もあらず登校する子、顔青くふるへて遅刻し登校する子

「つらいのは皆同じだ」は励ましの言葉にあらず暴力と知る

生来の差異の苛酷を思ひみき公平ならぬ大き力を

口癖

中村敬子

東京

秋空の蒼のふかみに息<sup>じ</sup>ひをり「なんだかなあ」は父の口癖

仰向けばわが家の白い犬がゐるはるなつあきふゆどの雲見ても

LED電球白し孫か子かわからぬ影が屋台をのぞく

人群れて灯りふくれる境内をそろりと歩く夜の狛犬

白ばらの秋のつぼみの小さきに「なんとかなる」は母の口癖

村の記憶

黒石

孝

新潟

大根の育つ畑がよく見えるベランダに家族の濯ぎ物干す

七十の脳に秋風入れながら川まであるく今日はなにせむ

持つてけと畑の婆がノコギリで切つてくれたり束の枝豆

コロナ後の明日を知つてゐるやうな鴉が騒ぐ今日の夕焼け

時季くれば実をふり零し立ちてをり村の記憶を持つクルミの木

ワーゲンの尻

榛葉貞代 静岡

大井川の風の道なる街路樹の棟の葉群ゆらめきて秋  
身一つに矍鑠と立つ大椽オカメドングリたつぷり落とす  
背せなの星割りて飛び出すてんと虫涼風ふけばふかれつつ消ゆ  
夏ばての猫の額を撫でてやる猫のおでこはけっこう広い  
ワーゲンのお尻はまろきカブト虫むかし夫があこがれし尻

巖然と青

河合育子 愛知

枯葉さへ漂ふものを倒れたる叔父ははらりと逝つてしまへり  
絵描きなる叔父の遺作の油絵のあきぞらのあを巖然と青  
独り身の叔父の死のち独り身のわたしに深いふかい夜くる  
壊れかけ風の中なる亡骸なきがらの蟬がまだ見てゐる茜空  
覚めてなほとろとろ眠しあざらしとわたしを行き来しつつまどろむ

空の高みに

才野洋 京都

「お看取りの時期です」と言ふ看護師の言葉の意味がしばしわからず  
弱りゆく父を見るなり懸命に息をしてゐる父を見るなり  
動かれぬ父の見詰むる秋晴れの空の高みにあるものは何  
我が家と父の施設を隔てゐる夜闇よ虫の鳴きつものる闇  
また来ると言つて別れて次の日に骸の父に会ふために来つ

屋上屋架

鮎川 清 山口

早ばやと鴨渡り来し樅野川ふしのがはまづは二群がエリアを定む  
北国の世情に飛来を早めしか鴨よ日本も平和危ふし  
アカハラと図鑑によりて同定す二足跳びする茶褐色の鳥  
反対の声おほかりし国葬に屋上屋架の山口県民葬  
県民葬を強行したる知事なれば言ひ出しかねず銅像建立

あをきた

吉里幸雄 福岡

この秋の朝の冷たき充実よ手にずつしりと肥後の栗の実  
うれしさをほんの少しくおそそわけ隣も老々お二人暮らし  
丈ひくき野菊の一叢われに向きうすむらさきにみなそよぎけり  
掠めしは青北風あをきたなりしか秋天へ黄蝶はたちまち紛れてゆけり  
つくだ煮の角切り昆布もひと品に秋は涼しきひとりの朝餉

きのふの嘘

立石千代女 長崎

にんじんの畑に低き虹生まれさんぼの児らの列が止まりぬ  
しろつめ草咲く草はらでテニス部の女子三人がボールをさがす  
うんうんと頷きくるる赤べこにきのふの嘘を食べてもらはう  
寝ころんで「我が家わがは良かあ」と言ふ母に施設にもどる四時半せまる  
ながさきは離島のおほか県やけど新幹線まで離れんちやよか